



家隆流の「六条家秘抄」について

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 正胤 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004702 |

家隆流の「六条家秘抄」について

三 輪 正 胤

はじめに

鎌倉時代後期における、歌道家の対立は、世に云う、二条・冷泉・京極の三派の抗争として処理できるものではなかった。為世流、為相流、為顕流、為実流、家隆流等々を設定し、その実態を明らかにしてきた訳であるが、その真相の究明には、猶多くの時間が必要とされている。

ところで最近「六条家秘抄」(天理図書館蔵)と題する本を見る機会を得た。同種の本は、数年前、国文学資料館蔵のものを調査していたのであったが、研究発表には些か躊躇されるところがあった。何しろ、孤本と云う存在は多くの疑問を孕むものである上、仮託書(「六条家秘抄」は、家隆に仮託されたもの)のもつ幾多の疑問が仲々払拭できなかったからである。ところが、この天理図書館

本の出現により、孤本としての問題点は、とりあえず解消することができた。

そこで、仮託書としての疑問点の解決が、当面の課題となった。以下本稿において、「六条家秘抄」は、家隆に仮託された「和歌灌頂次第秘密抄」と密接な関係のあることを証明し、この書は、家隆流のものであると論じ、それに併なって生ずる二、三の問題に言及してみたい。

一 諸 本

天理図書館蔵本は、旧竹柏園文庫蔵本である。

表紙は、茶色の横刷毛引き地で、その上に銀にて松葉と梅花を散らし描きしてある。縦二六・六糎、横二〇・五糎の大型本で、左肩に題簽があり、六条家秘抄と記す。題簽は、茶色地に、金にて横線

を引き、青にて菊花を描く。本文料紙は楮にて、袋綴、全葉三五丁ある。前後に各一丁の遊紙。第一丁の遊紙右下に、「竹柏園文庫」

の紫印、「就正館図書部」の朱印がある。第二丁右端に、六条家秘抄と記し、第二行めから本文が始まっている。第二丁右下端に「須田氏臣書部」の印記もある。六条家秘抄と題する部分は、第二丁表から第九丁表まで、第九丁裏から、和歌三重之大事と端書して、これが第二四丁裏まで、第二五丁表から第二六丁表まで、四病のこと、第二六丁裏から第三四丁表まで、歌病のこと他を記している。写しは江戸時代中期頃かと思われる。

国文学資料館蔵本は、久松潜一博士旧蔵の寄託本である。

表紙は、本文料紙と同じ楮紙。縦二二糧、横一五・五糧の大きさで、表紙中央に、直接、六条家抄、和歌三重大事と三行に記す。

楮料紙にて全葉三〇丁、後に一枚の遊紙がある。第一丁右端に、六条家抄と記し、第二行めから本文が始まっている。第一丁右下端に、久松博士の蔵書印がある。第一丁表から第八丁表までが、六条家抄で、次に一丁白紙をおき、第十丁表から和歌の三重の大事と記し、これが第二二丁裏まで続いている。第二二丁裏中央辺りから、第二三丁裏中央辺りまでが、四病のこと、続いて第二三丁裏中央辺りからが歌病のこと他で、第二九丁裏までである。写しは、江戸時代後期頃か。

二 構 成

その表紙に、天理図書館本は「六条家秘抄」、国文学資料館本は「六条家抄 和歌三重大事」と記すが、内容を調べてみると、本書は、四つの部分からなっており、両本の表記は、いずれも不十分であると思われる。

第一の部分は、後に記す如く、「和歌灌頂次第秘密抄」と関連をもっており、六条家と称した家隆末流の伝書と認定でき、「六条家秘抄」(以下、天理図書館本の名称を用いる)の名は、この第一の部分に関するものと思われる。『永享五癸丑年 孟春日傳斯書』と記す第一の奥書は、この書が永享五年(一四三三年)に伝えられたことを示している。第二の奥書は、飛鳥井家の秘伝である旨を示し、その最後を『明応五丙辰年 閏二月廿八日 孝昌写手』と止めている。孝昌なる人物は、今のところ不明であるが、明応五年(一四九六年)は、相伝書写の年と考えてよいであろう。

第二の部分は「和歌三重之大事」と端書されており、「和歌大綱」や「悦目抄」と関連しており、同じく鎌倉時代後期における為世流の伝書の成立に深く関わる問題をもつ書である。その奥書も『本云 康永四年十一月十四日書写手』と止めており、十四世紀半ばの、伝書が変容をとげる段階のものとしても、非常に興味深いものである。

第三の部分は、書名に類するものではなく、四病として同字、同音、同詞、同心を掲げており、喜撰式などの所謂和歌三式には登場しない歌病をとりあげている。これも少なくとも鎌倉時代後期以後における歌病の扱われ方と軌を一にしているのであって、ある秘伝書から抄出したものと考えてよいであろう。実際この第三の部分の奥書には、「此道之大事奥儀一抄是也」の言辞が見え、単なる恣意による抄出ではないことが知られる。その奥書の最後は、「文明二年庚寅二月日」及び「于時明応五丙辰年卯月二日書写卒」と止められており、先の「六条家秘抄」と近い年号であることに注意がむけられる。文明から明応にかけての年代は、伝書が再編成される時期であり、この段階で書写相伝されることにより、伝書は、その位置が一段と高まったことが予想されるのである。が、いずれにしても、このような四病を含む伝書は、今のところ指摘できない。

第四の部分は、同じく書名に類する表記はない。その内容を検するに、その大部分は、為顕流の「竹園抄」と相重なっており、他に為顕流の伝書と関係ありと認められるものが二、三混在している。ここには奥書類は一切記されていない。

以上みる通り、本書は、四つの部分から成っており、それらは皆、鎌倉時代後期の歌道家の対立の中から生れた伝書に関連したものであることが知られた。「六条家秘抄」という表題は、右の概観からも、第一の部分のみにかかる名称であることが判明した。で

は、この「六条家秘抄」は、どのような性格のものであろうか。それを次に調べてみよう。

三 「六条家秘抄」の性格

「六条家秘抄」と称する部分は、辺序題興(曲)流のこと、三体のこと、この二つを五儀三体と称し秘伝とする旨の奥書、人丸のほのぼのとの歌に関わる表裏と五体のこと、歌の重位のこと、点を相すること、当流の風体のこと、返歌の体のこと、以上八項目より出来上っている。

まず、辺序題興流のこと、三体のことは、「和歌灌頂次第秘密抄」と関連をもっている。

「和歌灌頂次第秘密抄」については、既に述べたことがあるが、その系統は二つに別れていた。第一類は家隆に仮託された書であり、第二類は、第一類の本に、為顕流の秘伝が付与されて成立したものであった。そこには、家隆末流と為顕流との激しい抗争が予想されたのであるが、この「六条家秘抄」は、純粹に家隆流の秘伝のみで成り立つ第一類本「和歌灌頂次第秘密抄」と関連をもっている。その対応の様相を次に記すことにする。

| | |
|---|---|
| 「和歌灌頂次第秘密抄」 | 「六条家秘抄」 |
| <p>三体と申ハ秘歌、一首に三のすかたある也。</p> <p>三のすかたと申ハ、一にハ、けたかく、二ニハ、やさしく、三ニハ、心をふかくよむなり。</p> <p>その本歌にいはいく、よそにのみ見てややみなんかつらきのたかまの山のみねのしら雲</p> <p>これにて心うへし</p> <p>(静嘉堂文庫蔵、延文二年奥書本による。以下の引用も同じ)</p> | <p>三体と云ハ、一首の内に歌のすかた三ツあるなり。</p> <p>一にハ、けたかく、二ニハ、やさしく、三ニハ、心ふかくよむへし。</p> <p>本歌云、よそにのみ見てややみなんかつらきの高間の山の峯の白雲</p> <p>(天理図書館本による。以下の引用も同じ)</p> |

右は、先ず三体のことを対照してみた。両者は、全く同文的と云つてよく、いずれかのいずれかへの影響関係を論ずることは、全くできない。

それでは、辺序題興流の五儀のことについては、どのようであらうか。次に、それを見てみよう。

| | |
|---|---|
| 「和歌灌頂次第秘密抄」 | 「六条家秘抄」 |
| <p>なににても、題をえて、はしめの五もんしに題をあらはす事あるへからず。</p> <p>はしめの五もしには、なにをいふやらんときこえて、五七の所にて題をあらはれねとも、あはれこれはいはんするよとおほえて、五七五にて題をあらはして、おくの七へくとかせて、おはりの七をいひなかつなり。</p> <p>たとへは五月やみといふ時に、五月やみには、なにをかいはんするやらんとおほえてある時に、</p> <p>くらはし山といふ時に、くらはし山はほとときすのすむ山なれば、ほとときすのすむ山なれば、ほとときすをいはんするよとおほえて、</p> | <p>先、題を何にてもあれ、得たる時は、始の五文字に題する事あるへからず。</p> <p>何にても、題を得ては、始、題のしたしき辺りを始の五文字にくへし。</p> <p>第一句、五月(暗)時鳥をよまんとて、郭公の時節を云也。是をほとりの詞と云也。されは辺と云。</p> <p>第二句、倉橋山のと云て、題の詞は頭れねとも、倉橋山には郭公ある山なれば、時鳥といわんするよと二の句の序に、思はする也。故に序と云。</p> |

| | |
|-------------------|--------------------------------------|
| ほととぎすときあらはして、 | 第三句に、時鳥と題を顕はして、題をきらさず、したしき詞をつつけんために、 |
| おほつかなくもと、くときて、 | 第四句に、おほつかなくもと、興をくとかせて、 |
| なきわたるかなと、いひなかななり。 | 郭公なれば、第五に鳴渡る哉と云なかなす也。故に流と云也。 |

ここでまず、両者の関係は、基本的には、全く同じ立場にあると云ってよいであろう。詠歌の際に、題は、句の第三に置き、第一、第二の句にては、それとなく題を示唆する詞をおき、第四、第五の句において、これを展開させ、緩かに一首をまとめよと云うのである。この根本義をうけ、両者は、ほぼ同文的に一致する部分をもちながらも猶、差異はある。「六条家秘抄」の方が、文脈的にはより整序されており、総体としての一つのまとまり意識は濃厚である。第一句は云々、第二句は云々とし、それぞれの辺序題興流の概念を明確にする方法には、一つ一つの重み、秘事としての重要性の意識が汲みとれる。このように、「六条家秘抄」が、五儀の伝を重視していたとみられることは、この秘伝の序文に相当する部分に、既に現われている。「和歌灌頂次第秘密抄」においては、この秘伝の重

要性を、一般的言辭においてしか説いていないのであるが、「六条家秘抄」においては、衣通姫が王津嶋大明神に顕現し、この五儀を秘したが故に、秘伝となつたと、より具体的に權威的に語られている。このような傾向は、その奥書の部分においても同じで、「六条家秘抄」の強い調子の文辭は變つていない。このように玉津嶋大明神に守護された秘伝の存在ということは、家隆流に對抗していた為顕流において、住吉大明神に守護された「玉伝集」「阿古根浦口伝」という秘伝書の存在を想起させ、両派の奥儀秘伝を通しての抗争が予想されるのである。

さすれば、「六条家秘抄」の五儀三休伝は、「和歌灌頂次第秘密抄」に対しては、奥儀秘伝的な位置を占めているかと思われるのである。

この結論に対して、五儀三休伝以外の伝は、どのような様相を示しているであろうか。

「六条家秘抄」が、五儀三休の伝に続いて記す、人丸のほのほのの歌の伝とは、このほのほのの歌の五句は、それぞれ五大、五気、五方、五仏、五功德を含むとし、詠歌一首の絶対なる効能を説くものである。これも又、「和歌灌頂次第秘密抄」が、ほのほのの歌を入丸一期の名歌とし、これが自性法身の妙理を現わすと説きあかし、この歌の五句に、五季、五方、五仏、五字の名号などを当てている説に、相通じている。しかし、「六条家秘抄」の方が、やや仏

教教的に統一し、深化させようとしている処は見えている。それは「六条家秘抄」が、この伝の結語的部分において、歌道も悟り悟れば、畢竟は心の空を悟ぞかし」と云い、更に「十方世界唯一心の体」を悟れば、結局は、仏道と歌道は一体であることが判るであろうと説く件の部分に、よく現われている。

次に、「六条家秘抄」が述べる、歌の重位のこと、点を相すべきこと、返歌体のことの三項目には、「和歌灌頂次第秘密抄」との関連は全く見出せない。しかし、「六条家秘抄」が次に説く、当流の風体のことは、又「和歌灌頂次第秘密抄」に深く関連している。

「和歌灌頂次第秘密抄」は、当世の体として三首の例歌を挙げたのみであるが、「六条家秘抄」は、この同じ三首の例歌を、当流の読み様として説き、これにその読まれ様の特色を記すのである。その当流様とは、題を五七五に頭はさすして、題のしたしき事を五七五の内に云て七々に題を云なり」と云うものであり、此三首は、当世の歌にも叶ひ、五儀にも叶うと結んでいる。当流風は当世風であり、それは、当流の秘伝である五義を内蔵したものと云う論理が、ここには伺える。先に、辺序題興流の五儀の伝の重要性を述べたのであるが、それが、この当流の風体のことの項には、見事に活かされている。

以上の結果から「六条家秘抄」は、五儀三体の秘伝を中心に構成された書であり、「和歌灌頂次第秘密抄」の五儀三体伝を、稍発展

的に述べたものと考えられる。特に、「和歌灌頂次第秘密抄」に対しては、奥儀秘伝書の位置にあると言ってもよいかと思われる。

四 奥儀秘伝としての意味

では何故に、五儀三体伝（特に五儀伝であるが）を中心に、奥儀秘伝書を作製する必要があったのであろうか。

その理由は、まず、家隆流に対抗していた諸流派の動向を探ることによって得られるであろう。

先にも述べた通り、五儀伝は、玉津嶋明神より伝授された秘事の形を採っていた。これは、為頭流において、「玉伝集」「阿古根浦口伝」が住吉明神及び伊勢明神より伝授されたとする形に相対抗していると思われる。この時代における仮託書は、唯単に、歌道の大家、定家や家隆から秘事が相伝されてきたとするには、余りにも不十分であった。神々が秘事を語ったとする事において初めて意味が出てくるのであったし、それが又、和歌の徳でもあった。「六条家秘抄」は、まずこの神の權威の下に創り出されたのであり、それはとりあえず、為頭流への対抗手段でもあったのである。この事を第一の理由としておこなうならば、第二の理由は、五儀の秘伝は、為頭流や為実流においても、重要な問題として採りあげられており、歌学上の論争点であったことが指摘できる。

これも既に述べた如く、五儀の辺序題興流の概念は、和歌一首

を、題を中心に統一しようとする詠歌上の問題であった。この概念は、俊成の「古来風体抄」以来の、題の詠み方と、詞の続けがらの二問題を、実に巧みに統一的に語り得る理論であった。

これが為顕流においては「和歌灌頂伝」⁽⁵⁾にみる通り、未だ十分な論の成熟をみていなかった。「和歌灌頂伝」においては、歌の体には、体用の二つがあり、体は題に、用は縁の詞に相当すると発想しながらも、これが和歌一首の統一の問題に至るとはせず、歌の体の分類の問題へと移っていった。その結果、篇序題曲流の概念は、標流友曲證、序題友曲證、惜序題曲證等々の分類名称の一として掲げられるに留まった。更に「和歌灌頂伝」は、この篇序題曲流の概念は「他家の義」であるとして、排斥するに迄至っている。

一方、為実流においては、「三五記 下」⁽⁶⁾において「凡うたよむに種々の習有りといへども、此の辺序題曲流の五つをは出でず」と言い、その重要性をまず強調してくる。そして、宇佐明神に参籠した貫之が、夢想で得た歌一首は、この辺序題曲流を備え、更にこの五句を人丸初めの五歌仙が読みついたものであると記すのである。その上「辺は歌をよまむとするかたはし。序はまさしくよまむとするもの濫觸。題は歌の題なり、題をこの句にてまさしく云ひあらはずべし。曲はやさしき事を興あるやうにいふなるべし。流は五尺のかづらを水に入れたるやうに、いういうと読みなすべきなり」と、家隆流とは少異を以て語るのである。興と曲を対応させ、

その概念を幾分か違えることにより、両派は明らかに自己を主張でき一派であり得たのである。

以上にみる通り、為顕流、為実流は、それぞれの立場から、辺(篇)序題曲(興)流について発言するのである。家隆流は、この動向の中で自己主張したのである。特に最もよく整理された理論をもつ家隆流にとつては、これを興儀秘伝にしようとする意志は強かつたものと認められるのである。

このような強い主張の姿は、「六条家秘抄」という、書名の命名の仕方にも、実はみとれる。

祐徳神社文庫蔵の「和歌灌頂次第秘密抄」⁽⁷⁾の跋文に、次のような記事がある。「右此抄は、新古今比、宗匠定家、家隆、雅経とて御座。此中定家は二条流とて、昔より相統。家隆は六条流とて定家俊成の弟子たりし共、六条院とて歌もすこしかはりめ有。然は此四人、肝要を取て此抄集給ふ所也。」

「和歌灌頂次第秘密抄」の作者は、定家、家隆、(有家)、雅経の四人であったのだが、中でも定家が中心であった。家隆はこれに次ぎ、定家が二条流と云うのに対し、六条流を名乗っていたと云う訳である。

家隆流の秘伝書に最も適しい名称は「六条家」の「秘抄」であるとの判断の根拠を、この記事は伝えているのである。

以上に見る通り、「六条家秘抄」の出現は、家隆流の実態解明に、⁽⁸⁾

又、相對していた為蹟流の秘伝の成立に、更に他流派の形成に新たな問題を投げかけてきた。

それらの問題のいくつかに、能う限りの論証を試みたのだが、猶、論じ残した問題の方が多いかと思う。が、それらについては、又他日を期することにして、一先ず筆を措くことにしたい。

註

(1) その概略については、次の拙稿がある。

「定家偽書の作者・享受者はいかなる人々か」〔国文学〕昭和56年6月号 学燈社。

(2) その詳細は別稿を予定している。

(3) 拙稿「家隆仮託書の検討——和歌灌頂次第秘密抄をめぐって——」〔大阪府立大学紀要人文・社会科学〕第十九巻（昭和46年3月）。

(4) 拙稿「竹園抄歌論の生成と発展——玉伝集・阿古根浦口伝について——」〔名古屋大学国語国文学〕十三号（昭和38年11月）。

(5) 拙稿「家隆仮託書の検討——和歌知蹟集・和歌口伝抄をめぐって——」〔大阪府立大学紀要人文・社会科学〕第十六巻（昭和43年3月）に、その全文を翻刻してある。

(6) 「三五記下」に見える、為蹟流との強い対抗意識は、次の拙稿で指摘した。

「中世歌学における仮託書の様相」〔中世評論集 鑑賞日本

古典文学第24巻〕昭和51年6月 角川書店。

(7) 本書は「和歌灌頂次第秘密抄」の第二類本に当る。表題は「和歌灌頂抄」と記され、享保二十年十二月廿六日、極月堂子健の筆写になる。

(8) 家隆流の人物については、注(5)の拙稿において、家隆の息、隆専、又家隆の孫女等を想定した。その後、「和歌灌頂次第秘密抄」の当世の風体の第二首めの歌が、家隆の息、隆祐の歌であることが判明した〔藤原隆祐朝臣歌集〕に所載されている。更に、この歌は、彰考館本「和歌秘密灌頂」や東北大学図書館狩野文庫本「和歌秘抄」によると、隆祐が歌合の場において名誉を得たものとされている。これらの事柄には、隆祐を称揚しようとする意図が感じられる。家隆流の人物として、隆祐を新たに加えることができるかと思われる。

翻刻

「六条家秘抄」

。天理図書館蔵の「六条家秘抄」の部分、原本に出来る限り忠実に翻刻する。

。国文学資料館蔵「六条家抄」との主な異動を（ ）の中に記す。

。便宜の為、句読点を私に付した。

。本翻刻は、天理図書館翻刻許可によるものである。

天理図書館の御厚意に感謝するものである。

六条家秘抄

昔、允恭天后后衣通姫と申ハ、世に傳ふる哥実也。是ハ紀伊国和哥吹上の浦に、玉津嶋大明神と顕れて住給ふ。本地観音にて渡らせ給ふ也。衣通姫と申事ハ、はた美しくして、光衣を通りて見へし程に、衣通姫とぞ申ける。此二神、五義を秘し給ふゆへに、かくしるす所也。其五義と云ハ、辺五序七題五興七流七、縦ハ五月やみくらはし山のほとときすおほつかなくも鳴わたるかな右の五義のころろハ、題を置の所を定むる也。

先、題を何にてもあれ、得たる時ハ、始の五文字に題する事あるへからず。何にても題を得てハ、始、題のしたしき辺りを始の五文字にをくへし。

第一句五月晴（暗）時鳥をよまんとて、郭公の時節を云也。是をほとりの詞と云也。されは辺と云。

第二句倉橋山のと云て、題の詞ハ顕れねとも、倉橋山にハ郭公ある山なれば、時鳥といわんするよと二の句の序に思はする也。故に序と云。

第三句に時鳥と題を顕はして、題をきらさず、したしき詞をつつけんために、第四句におほつかなくもと、興をくとかせて、郭公なれハ第五に鳴渡る哉と云なかず也。故に流と云也。是にて題の置所を心得へし。何れにてもかくのことくなるへし。

題の文字を取て、五七五の処に置て、のこる文字をはつつめて、上下の句の中に便宜よき縁を求て、聞よきやうに置へし。かかる五義の教にたにも、題を置てよみぬれハ、四病八病ものをのつからよつかす、卅二相の妙理を具足して、如來造立の奇特と成。よくよく可秘。

次に三跡と云ハ、一首の内に哥のすかた三ツあるなり。一にハけたかく、二にハやさしく、三にハ心ふかくよむへし。本哥云、よそにのみ見てややみなんかつらきの高間の山の峯の白雲

右ハ衣通姫の一流秘傳、不思議に奉拜、逢龜之浮木、七世之孫事、殊勝之至也。後生必輒不可思之、縱令雖與金玉寶珠、不可授無心他家。右五儀三体は、いみじき秘事と懐込、聊不可出一言者歟。

哥ことに表裡有り。是甚深の秘事也。此詠しやうにて哥の病除きやすきなり。

第三 ほのほのと

第四 あかしの浦の

第一 朝きりに

第二 鳴かくれ行

第五 舟をしそ思ふ

是ハ返々甚深の口傳也。凡哥誦人ハ此意有也。哥ことに五躰あり。五方有。五智の如來あり。故に和哥一首誦れハ、即身成佛して大覺之位に至る。その證哥に云。

ほのほのとハ、地也。身肉也。又東方、葉師如來、大日鏡智なり。

明石の浦のとハ、水也。身血也。又南方、宝勝佛、平等性智也。朝霧にとハ、火也。暖氣也。又西方、阿弥陀如來、妙觀察智也。

鳴隠行とハ、風也。身氣也。又ハ北方、釈迦牟尼佛、成所作智也。

舟をしそ思とハ、空也。身心也。又中央、大日如來、法界性智

也。

何も哥ハ介様に有也。故に病哥は病佛とて忌也。和歌一首ことに地水火風空そなハリ、又ハ五方五佛そなハラぬハなし。故に哥道も悟り悟れハ、畢竟ハ心の空を悟そかし。されハ、心の空を悟らハ、三界唯一心にして、心の外に別の法なし。只、心空を悟るときハ、四病八病をつからなし。此時ハ生死もなく、迷悟もなく、男女の相もなく、徳失もなく、是非もなく、取捨もなく、増受もなく、ことごとく十方世界唯一心の躰と悟りぬれハ、佛神と我身と更に二もなきなりと云なり。

右兩条表裡と五躰と甚深至極秘事也。いまた武家にくたらざる大事そかし。秘しても、いよいよ可秘事也。

歌の重位之事

初の位の哥

いつわりのなき世なりせハいかはかり

人のこと(の)葉のうれしからまし

是ハ思事をすくに云也。有のままなる躰也。此躰に読ハ、何百首読とも、わつか一首の読ての人なり。余も又加此。

第二位に上る哥

秋の夜の月に心のすむ時は

そらにそ山の奥ハ有ける

是ハ空を山のおくとよみ、又ハ春を秋と読かへ、珍敷新しく読は、

第二位の哥とするなり。

第三位上る哥

なからへハ又この頃やしのはれん

うしと見し世そ今ハ恋しき

第三の位の哥ハ、第二位の飛たる躰を読和けてよむなり。さるけ

れは、第一の位の哥にて、是又たくみ深きなり。

第四位に上る哥

我恋ハ障子の引手嶺の松

火打袋に驚のこゑ

是ハ佛菩薩も、うかかい得ぬ躰也。されとも恋の哥にハ深心の風なり。

和歌血脈相傳

天照皇太神宮

住吉大明神柿本人丸次第而傳、醍醐天皇此後又次第傳人數略之

点を可相事、五義三躰のはなれすハ、長点たるへし。他所よりの

点の事、題の次第不同を見るへし。仮名の文字つかい、上から可

見。先此三つをよく見て、三ながらととのをりたらハ相へし。当座

の点ハ、雜帶折敷のはしにてもかけ、哥よくハ相へし。但兒女房の

哥ハ、心浅くとも、又ハよハくともやさしくハ点を相へし。又詞姿

わろくとも、僧聖ハ道理つよくハ相へし。これらは点者の時の機に

よりてはかるへし。

当流のやうによむ哥

題を五七五に頭ハさすして、題のしたしき事を五七五の内に云

て、七々に題を云なり。本哥云。

山路の雪と云題にて

里までハふらさりけりと旅人の

いふに山路の雪をしらるる

是にて心得へし。故に定家のいはく、細布の直垂に錦の袴をきす

との給ハ、此山路の雪のことくなるへし。

又当流に一首を二に分て見るに、上句にも道理頭ハれすハ下句に

も道理不頭よむへきなり。本哥云。

古寺の庭の芭蕉の一つ葉を

あまたになれと秋風そふく

又本哥に、秋風と云題にて

露をこそ何にもふかめ萩の葉に

おかぬ涙をさそふ秋風

降さりけりと云哥と古寺の哥と露をこそその哥と此三首ハ、当世の

哥にも叶ひ、五義にも叶心へハ、何にてもあれ哥ハかく可読なり。

人方より哥を得て返哥すへきやう。本哥云、

名にしおハ、いさ事とハん都鳥

我おもふ人ハありやなしやと

此哥を本哥にして

名にしおハ、いさ事とハん都鳥
すみえぬ方の里の名もうし

又云

書つくる跡ハ千年も有ぬへし
わすれす忍ふ人やなる(か)らん

返歌

書つくる跡ハ千年もなかりけり
忘れす忍ふ人ハあれとも
是にて可得意

永享五癸丑年孟春日

傳斯書

右之一帖飛鳥井殿秘傳也。先祖刑部卿頼経從左近少将雅経剽讓所
之家秘抄、更以不可有他見者也。

明應五丙辰年閏二月廿八日 孝昌写早

(写早
今持孝昌)